ラオス農村の生活用具からみた生存基盤研究

平成 23 年入学
派遣先：ラオス人民民主共和国
福島　直樹

キーワード：ラオス，農村，焼畑民，生活用具，人的ネットワーク

対象とする問題の概要

ラオス人民民主共和国（以下ラオス）では 1990 年代前半から貧困削減に取り組んでいる。自然環境破壊や麻薬栽培の主たる原因にも貧困問題があるとされ，政策の優先課題に位置づけられている。そうした政府や NGO，国際機関の取り組みによって，現在の「貧しい農村」観がつくられたのではないか。先行研究では，代替商品作物の導入（Neef 2010）や非木材林産物の活用（Sunil 2010），家畜飼養や肥料導入のための金融面での支援（Phinseng 2006）など，貧困削減のための取り組みの有効性がさまざまに検討されてきた。しかしながら，住民が直面する旱魃や病虫害による不作，病気や怪我，子供の就学による労働力不足等の課題がどのように実生活上の課題として顕在化するのか十分に検討されてこなかった。また，これらの問題発生のリスクを軽減するために彼らが構築してきたであろう独自の仕組みについて検討されてこなかった。そうして貧困問題の解決の方向が，世帯の生計を向上させることに傾倒しがちであった。

研究目的

ラオス農村に居住する人々は，どのようなスケールでどのように暮らしの再編を進めているか。この再編の際に，村人にとっての課題はどこにあるか。杉原ら（2010）は生存基盤という分析概念の導入を提案している。ここでいう生存基盤は，「個人や地域社会が自己を維持するために必要な物質的精神的諸条件（The basis of livelihood catering for survival，reproduction and subsistence）」と定義されている。本研究の目的は，伝統や習慣による生産と分配を考慮しつつも，消費や再生産を切り離さない生存の視座をもつことにより，農民独自の生存維持の仕組みを再評価することにある。具体的には，生活用具の保有と貸借状況を調査することをとおして，生活の変動を制御する技法を明らかにすることを目的とする。生活用具の多様な機能やそれらの組み合せにも注目することで，「貧しい農村」の再評価につなげたい。

写真１．調査集落へ向かう道

フィールドワークから得られた知見について

2012 年夏の前回調査とくらべて，集落の居住域が 2 km ほど西に移動した。政府主導の移住政策による。2013 年 3 月に M さんの世帯が最初に移住した。その後，２年間かけて計 29 世帯が 1 世帯ずつ移住した。旧集落には，現在 2 世帯を残すのみとなった。この 2 世帯も移住する予定である。新集落は旧集落と隣接する集落とが合併してできた。人口にしてほぼ 2 倍の規模になった。焼畑地については，移住前と同じ区画を使う者もいた。移住により，耕作地が遠くなった世帯ばかりではなく，近くなった世帯もあった。昨年，ベトナム系の企業が新集落の近くにある農地を借り上げてトウモロコシ栽培をおこなった。しかしトウモロコシの市場価格が下落して撤退したという。当該企業による一時雇用により現金を得た世帯があった。一方，カボチャの市場価格が上昇しており，今後のカボチャ栽培の拡大を見越して，T さんは種を販売する目的でカボチャ栽培を始めた。

前回調査した 32 世帯のうち 27 世帯について追跡調査することができた。調査できなかった 5 世帯のうち 3 世帯は遠方の集落に移住し，もう 2 世帯は消滅していた。遠方への移住では，母子家庭の世帯が再婚により移住した世帯と，ミャンマー国境に近いボーケオ県で働くため挙家離村した世帯があった。また<母－子－孫>家庭の世帯で，孫が街で職を得て母を呼び寄せた世帯があった。子は一人だけ旧集落に残った。この世帯は移住と消滅の中間ともいえる。世帯の消滅は 2 世帯あり，１世帯は夫の病死により消滅した。この妻は再婚し，子供は夫方の親戚に預けられた。もう 1 世帯は夫婦の離婚により消滅した。この妻は子供を連れて郷里に帰り，夫は生家に戻った。

1982 年設立の同集落が移住政策を経験するのは，これが 2 度目である。バイクや耕作機械，携帯電話など，自前では作れない生活用具を購入するばかりでなく，以前ならば自前でつくっていた農具や調理具，食器，衣服，家具などでさえ購入する者が増えた。

複合的な人的ネットワークに基づく交換が貧困リスクを軽減しうると考えてきたが，生活用具・コメ・カネの交換を成立させる前提条件としてのそれらに対する所有意識の差異について個別に検討することなしに，それらの交換を一律に議論することはできないように感じられた。

写真２．調査集落の景観

今後の展開・反省点

調査はすべて Lao 語に頼っている。主流民族の Lao 人が用いる言語による調査は，山地民の暮らしの実情を正確に反映しないだろう。調査集落で使用されている Hmong 語の習得に努めたい。

今回の調査から，生活用具が消耗品であると改めて思い知らされた。２年前に集落内 137 品目 2,488 点の生活用具の一つひとつを個体識別し，今回その追跡調査を試みた。けれども一部の耐久消費財を除いてほとんど残っていなかった。つまり日々使用され消耗していく生活用具の変化を追うためには，もっと短いスパンで調査をおこなう必要がある。数週間のスパンで変化する生活用具を含む制約条件と，数年のスパンで変化する制約条件とを区別して総体的にとらえていくことで，はじめて村人にとっての課題を見極めることができるだろう。そのために生活用具のどんな点に着目すれば在来知をよりよく表現できるかについて再度，検討したい。

写真３．森に残る不発弾を加工してつくった鍋

写真４．足踏み式の杵（きね）

【参考文献】

Neef, A., P. Suebpongsang, C. Manythong, W. Tacheena and K. Ogata., "Can Paper Mulberry Contribute to Building Sustainable Rural Livelihoods in Northern Laos?" *Japanese Journal of Southeast Asian Studies* 47.4 (2010): 403-425.

Sunil, K. C. *Importance of Non Timber Forest Products on the Economy of Rural Household: A Study in Northern Laos*, Hong Kong: Chinese University of Hong Kong，2010.

Channgakham，Phinseng. "The effects of a fertilizer loan on dry-season rice cultivated areas in Laos," *Economics Bulletin*，15.12 (2006): 1-8.

杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺明生,『地球圏・生命圏・人間圏―持続的な生存基盤を求めて』，京都大学学術出版会，2010.